Kwansei Gakuin University

「セーレン・キェルケゴールの新版全集の刊行」

ニールス・カペローン
（訳・橋本　淳）

訳者　序

デンマーク・コペンハーゲン大学キェルケゴール研究センターでは、目下、セーレン・キェルケゴールの著作活動を総合する批評的新版全集（Søren Kierkegaards Skrifter）の刊行を始めている。この新版全集には、既刊の著作全集及び日誌・遺稿集など、これまでに知られるキェルケゴール資料の全体が所収され、精細な本文批評・注解が加えられる。

昨秋、関西学院大学の客員教授として来訪されたフィン・H・モーテンセン教授は、この新版全集刊行の責任編集者の一人で、刷り上がったばかりの最初の5巻を持参して来られた。キェルケゴール研究史上、世紀の偉業ともなる出版物を手に取った最初の日本人が、われわれであったと自負している。国家的な規模で展開されるこのプロジェクトについては、以前に、モーテンセン教授の論稿を邦訳して紹介したことがある。(「神学研究」第40号、1993年)。

本論文の執筆者ニールス・カペローン（Niels Jørgen Cappelørn）博士は、キェルケゴール研究センターの所長をつとめ、新版全集刊行の総責任者である。氏は、先にデンマーク聖書協会総主事として旧新約聖書のデンマーク語現代語訳を指導してこれを完成され(1993年)、その手腕が高く評価された。カペローン氏と訳者とは長年にわたって親交があり、訳者が最初にデンマークを訪れた折、氏は当時、キェルケゴール研究の碩学、故ツルストルプ教授の助手をされていて、訳者を親身になって世話して下さった。ふたりの再会をめぐって、以前に記したことがある（「本のひろば」1996年11月号)。カペローン博士は、本

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

稿でもって、新版全集の刊行がどのような意義をもち、又、如何な性格のものであるかを明快に紹介されている。それは同時に、キェルケゴール・テキストに関して全く無反省なまま、しばしばデンマーク語原典全集第三版（これに対する辛辣な評言は本稿87ページ参照）に典拠してなされるキェルケゴール著作の日本語訳あるいはキェルケゴール研究に対する、厳しい叱責でもある。まして、専らドイツ語訳や英語訳等の重訳に依るキェルケゴール著作の日本語訳・研究等は、それ以上に問題となろう。このようにして、今では世界の趨勢から遅れをとった日本のキェルケゴール研究、それを許容している出版界に対して、本訳稿が警鐘となり「覚醒と建徳のために」（キェルケゴール）役立つことが出来れば、と願う。

〔原文は、デンマーク文部省が発行する **Kulturbrev 9**（1996），s.20-39に所載されたものであるが、これは1995年にデンマークのソーストラップ城で開かれた大学研究者セミナーでの講演を筆録したものである。日本語訳に際し、カペローン氏から暖かな許諾を得ている。文中の〔　〕は訳者による〕。

はじめに

はじめに、キェルケゴールの手稿文書がどのように発見されたか、その後それがどのような運命を辿ることになったかを述べる。次いで、既存のキェルケゴールの著作全集・日誌遺稿集等の刊行物に言及し、最後に、目下キェルケゴール研究センターで遂行されている批評的新版全集の刊行について紹介をしたい。

レギーネ・オルセン

セーレン・キェルケゴールが1855年11月11日に逝去して数日後、義兄J・C・ルン（国立銀行財務部長）は、当時オルボー区監督職にあったキェルケゴールの長兄ペーター・キェルケゴールに手紙を送り、その中でルンは、キェルケゴールが居室に残した遺言状の内容について述べている。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

遺言状によれば、キェルケゴールは自らの遺産相続人としてレギーネ・オルセン（シュレーゲル夫人）を指名していた。当時レギーネは、デンマーク領西インドのサン・クルワ島に、総督として赴任していた夫シュレーゲルと共に滞留していた。ここで彼女は、亡きキェルケゴールが残した遺産の全部を受け取るよう指名されていた旨を、送られてきた手紙を通じて初めて知った。しかし彼女はこの申し出を、丁重に感謝をもって辞した。その代わりとして、彼女が以前にキェルケゴールに書き送った自分の手紙の全部、さらには、彼女にあてたキェルケゴールの手紙の全部を受け取りたいと願った。これに加え、婚約時代にキェルケゴールから贈られて彼女のものとなっていた品々を、もう一度手にしたいと所望した。

このあと彼女の許には、これらの手紙の凡てが送られてきた。そのとき、以下のものも一緒に包装されていた、すなわち、キェルケゴールが1841年にベルリンから親友のエミール・ベーセンにあてた手紙（そこではレギーネとの関係が告白されている）、および「わたしと彼女との関係、少し詩的に」と題された1849年の日誌ノートである。それゆえこの日誌ノートは、一旦はデンマーク本国から離れて、1856年にサン・クルワ島へ渡ったことになる。

さまよえる遺稿文書

キェルケゴールの甥ヘンリク・ルン（先のＪ・Ｃ・ルンの息子）は、すでに1856年11月には、遺稿文書全体にわたる目録作成にかかっていた。ルンは、ペーター・キェルケゴール監督にあてた手紙の中で、遺稿が最初に発見された通りの順序で目録作成に携わっている旨を伝え、自分がそれを為すのも、亡きキェルケゴールが自分を指名してこれに当たるべく定めていたと、理解しているからだと述べる。

しかし、はっきりと言ってペーター・キェルケゴール監督は、ルンの行動に対して大いに不満であった。ペーターにすれば、ルンが自分勝手に着手した仕事を余計なことと思い、これ以上に進展しないよう願った。そこで彼はヘンリク・ルンに仕事を中断するよう求め、1856年の夏の間に遺稿文書全体を幾つか

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

の箱に納め、指示通りに処置するよう要請した。このあとペーターは、デンマーク王立図書館に申し出て、これらの遺稿文書を受け継ぐ意向があるかどうかを打診した。しかし館長は、この申し出を断っている。館長の懸念は、遺稿文書を見たいとする希望者が次々と数多く現れるに違いなく、王立図書館としてはそれを望まなかったからである。

遺稿文書はどうなったのか。困ったことに、ヘンリク・ルンは西インド(Sankt Jan) へ旅行に出てしまっていた。遺稿文書は、J・C・ルンの家に置かれたままである。恐らくルン家の廊下、引出し、書棚の中などに収納されていたのであろう。このままで保管を続けるにしては、余りにも大量であったことを思うべきである。そこで1858年ペーター・キェルケゴールは、オルボーの監督館に移管する決心をした。こうしてこれらの文書は、どのような道途を経たかは不明ながら、いずれにしても大ベルト海峡を渡って監督公邸に届けられ、庭に面した大きな部屋でガラス戸つきの書棚に収められた。

遺稿文書の整理

遺稿文書は、監督公邸に置かれたままで何ひとつ手が着けられないでいた。もっともペーター・キェルケゴールは、亡弟が死後に刊行されるよう願った遺稿『著作活動の視点』を1859年に出版している。しかしそれ以外では、ペーターが1865年になって弁護士H・P・バーフォーを監督秘書に選任するまで何事も生じなかった。バーフォーを任用した理由は明白で、亡弟の遺稿文書全体の整理を託すためである。バーフォーは一人の弁護士でしかなく、従ってこの大量の遺稿文書を整理するために必要とされる言語学的な前提があったとは、とても思えない。こうして彼は、キェルケゴール没後10年となる1865年11月11日に、彼なりの熱意をこめた仕事を終え、尊敬するペーター・キェルケゴール監督に目録を手渡している。

それは、かなり良く出来た目録で、472番まで番号が付され、その内の382番までは、ヘンリク・ルンが手がけて未完に終わった目録と一致する。先のルン

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

の目録では、遺稿文書が錯雑している場合、その状態のままで放置され手がつけられないでいた。今回もそのままで放置された。それでも事実として、キェルケゴールの日誌のうち1834年から46年にわたる凡てに対する目録を得たことになる。それゆえバーフォーが途中で断念しないで、ここまで仕遂げた仕事は十分に好ましいことであった。この目録の中でバーフォーは、完全性を期する上で念のためにと付言して、キェルケゴール監督が遺稿のうち幾つかのメモの類いや手紙などを故意に隠していて、自分はそれらを吟味する機会を得なかったため、目録に所収できなかったと打ち明けている。つまりは、バーフォーの目録に記された以外に、ペーター・キェルケゴールが手許に囲っていた文書がなおも存在していたことになる。

1867年の秋、次第と年齢を重ね心身ともに憔悴してきた老監督は、亡弟の遺稿を放置したまま何も為さないできた自分を責め、苛責で悶えた。そこで彼は、遺稿文書から自分が完全に手を引いてこそふさわしいと決心し、凡てをバーフォーに託した。こうしてバーフォーの多年の夢が実現した。さらに彼は、遺稿文書を整理するだけでなく、それと共に、孤高の天才思想家が記したこれらの刊行者となる許諾を、ますます願うようになった。

年代的な整理の誤謬

バーフォーは仕事を進め、そこで遺稿文書全体を包装し直した。このとき、キェルケゴールの遺稿文書に年代的な誤謬を犯す結果となった。というのもバーフォーは、自分の判断に基づいてこれらの文書を年代順に配置して、再包装していったからである。つまり彼は、遺稿文書が当初に発見された本来の状態を壊して、自分の判断による年代順に整理してしまったのである。彼はそれらを新しい包装でつつみ、ガラス戸付きの書棚へ納めていった。その上で、各包装物の中味について、それが全体の中の何れであるかを示す細かな指示を記した。しかしこれは、キェルケゴールが残した当初の状態のものではなく、バーフォーの手によるものである。こうしてバーフォーは遺稿文書の出版準備にか

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

かり、1869年に最初の第一巻が現れ、続いて1872年に二冊のものが出た。この頃ペーター・キェルケゴールは憂愁に陥り、その精神的な疾患が高じて1875年には監督職を辞した。

ペーター・キェルケゴールは自分の凡ゆる罪をことごとく懺悔して、平穏な余生を得たいと願った。このため、世間の非難から身を守るためにも、遺稿文書から離れる必要があった。というのも、それら凡てをバーフォーに託したとは言え、監督公邸に保管されてペーターと共にあったからである。それゆえ彼は、辞職する機会にこれらの文書を他に移したいと願った。

そこでペーター・キェルケゴールは、1875年5月31日、コペンハーゲン大学図書館にあてて手紙を書き、意向を打診した。この中で彼は、1856年4月に亡きキェルケゴールの蔵書が競売に付された折、自分の手許に留めた亡弟の幾冊かの蔵書の全部をも、あわせて寄託したいと申し添えている。同年の6月5日、大学図書館長P・G・トーセン教授から、「この上ない喜びと感謝をもって」受諾したいとする意向が伝えられた。こうして1875年秋には、キェルケゴールの遺稿文書が公式に引き取られたと言える。しかしそれは大学図書館であって、現今のように王立図書館ではなかった。

遺稿文書は、新たな包装でコペンハーゲンへと送られた。しかしこれらの包装は、バーフォーが年代順に仕分けしたものとも違っていて、再びここで原初の状態から離れたものとなっている。このようにして大学図書館へ移送されたときには、又しても別の新しい包装物に変わってしまった。図書館では、1878年に新しい目録を作成した。一方、バーフォーの下で刊行が続き、キェルケゴールの1847年の日誌記述を集めた刊行物が、1877年に出た。この時点でペーター・キェルケゴールはすでに監督職から離れていたが、なおバーフォーはオルボーの監督事務所に留まっている。けれどもこれ以上の刊行を継続するのが、困難となっていた。周知なように、バーフォーに対しては厳しい批判が浴びせられている。というのも、キェルケゴールと同時代の人物たち――ハイベヤー、シバーン、ミュンスター、マーテンセン、クラウセン、ゴルスミットなど当代

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

のロマン主義思想家たちに対するキェルケゴールの発言内容が厳しく、このためバーフォーは日誌記述の中でこれらの人名を伏せ、単にそれぞれのイニシャルを記すだけにとどめたからである。

ドイツ人後継者

バーフォーの判断では、キェルケゴールの遺稿文書を刊行する自らの後継者をデンマーク国内で得ることが困難と思われ、彼はチュービンゲンに赴き、ギムナジウム教師ゴットシェートに白羽の矢を立てた。チュービンゲンでは、以前からキェルケゴールに対する関心が高まっていて、多くの学生たちがキェルケゴールを原文で読むためにデンマーク語を学習していた。その中の一人が、ゴットシェートである。彼は母国を離れてオルボーに移住し、刊行事業を継ぎ、1881年に完了した。しかし遺稿文書はコペンハーゲン大学図書館に収蔵されていたため、出版するたびごとに再び小さな包装物となってオルボーへ送られ、そのあと再度、大学図書館に返送された。

第二次世界大戦中、遺稿文書は大学図書館から疎開され、1945年にデンマークがナチス・ドイツの占領から解放されたのち、これらは王立図書館へ移された。そして今日のように、「キェルケゴール文書資料」(Kierkegaard Arkivet)と呼ばれて、王立図書館が誇る至宝の一つとなっている。

ヤンセンの肖像画

しかしこの折でもなお手渡されていない資料が存していた。それはレギーネの許にあった。彼女が西インドから帰国して数年後に夫が亡くなったあと、1898年11月になって彼女は、それらを大学図書館に寄託した。これらの資料というのは、キェルケゴールがレギーネ夫妻にあてた手紙の凡て、親友ベーセンあての手紙、そして「わたしと彼女との関係、少し詩的に」と題されたノートである。これらの他に、彼女自身がキェルケゴールにあてて書いた手紙も残されていたと思われるが、それらはすでに処分されていて、今日ではもはや見ることが出来ない。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

1904年にレギーネに関係した書物『わたしと彼女との関係』が出版された。本書の序文の中で、レギーネと接見したときの様子が刊行者の手で伝えられていて、彼女はとても愛らしく素敵な婦人であったものの、高齢のため〔82歳〕、その記憶力が十分でなかったと述べられている。

人々は偉大な哲学者キェルケゴールを身近かで熟知する者として、ここで彼女を錯誤した。それは、キェルケゴールに対する大きな関心が高まった今世紀初頭の、1904年であったことを銘記すべきである。セーレン・キェルケゴールの著作全集の刊行が始まっている時期でもある。このような関心からキェルケゴールの肖像を描きたいとするルプラウ・ヤンセンの感動的な物語も、今日に伝えられている。今その肖像画は、かつてキェルケゴールが若いときに講演したことがあるコペンハーゲン大学学生協会の壁に掛かっている。

ルプラウ・ヤンセンは、最終的には二枚の肖像画を描き、一つが学生協会に、他の一つがフレデリクスボアー城歴史博物館におさめられた。ヤンセンは週に一度は、当時フレデリクスベアーに住んでいたレギーネを家に訪ねた。彼女はその絵が故人に似ているかどうか、よく分かっていたにちがいない。だからいつも彼女は手を叩いて言った、「ヤンセンさん、あの方に何とよく似ておりますことでしょうか」、と。このヤンセンの絵は、その後の学生協会と運命を共にした。今は、学生協会は場所が移って、以前の建物は解体された。このとき絵画類のすべては、ヴァルビュー市の或る家の地下室で保管された。あるとき私は思いついて、ヤンセンの絵を自分の居間に掛けることが出来れば何とすばらしいかと、――そこでヴァルビュー市へ行ってみたところ、キェルケゴールの肖像画は水に浸っていた。その他の多くの絵画も同様であった。そこで私はヤンセンの絵を取り出して、それからの三年間、私の家の壁に掛けていた。その後、学生協会から申し出があって返還した。

初期の目録

遺稿文書に対する初期の目録について、その性格及びそれに対する私の批評を述べたい。率直に言って、これら初期の目録のために、我々は遺稿文書に対

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

する年代的な間違いを犯す結果となった。目録の一つは、先に言及したルンのもので、これは1856年1月17日に中断してしまっている。この所で興味をひくのは、ルンの目録に付せられている補遺の部分である。それらはおそらく、この時に用いられなかった資料のもので、今日我々が目にする大学図書館作成の目録では、後ろに置かれてある。

ヘンリク・ルンが言う「遺稿文書の順序」では、目録の何番はどこにあったかなど、随分と詳しい説明が下されている。例えば、机の左側の引出しの中であったとか、机の下には包装された別の番号のものがあったとか。それゆえ我々は、キェルケゴールがどのように遺稿文書全体を整理して包装して残していたかを、かなり正確に知ることが出来る。しかしこれらがばらされて、まったく攪乱されてしまったのである。というのはバーフォーが、これらを一つの絶対的な年代順に配置しようとしたためである。

ルンの目録のほかにバーフォーによる目録があり、さらにはこれを補完した大学図書館の目録（P・A・ハイベヤーによる）が存在する。ここでも、目録の何番がどの包装物の中で見い出されるか、概要が示されている。ルンやバーフォーの目録は、キェルケゴールの遺稿文書の各々が当初ではどのような状態で置かれ、どのように相互が関係するものであったかを理解する上で、重要となる。従ってこれらの目録類は、我々の新版全集の刊行にとって、正に黄金にも値する。

バーフォーの刊行物

先に私はバーフォーの刊行物を話題としたが、なお若干の指摘を加えたい。バーフォーにとっては本文批評に対する考えが少しも念頭になかったし、その必要性も覚えなかった。彼には一貫した願望があった。すなわち遺稿文書を刊行することによって、一つのキェルケゴール像を間接的に提示したいと願ったのである。以下で示される彼の原則を読めば、本文批評とは全く無関係にテキストが処理されている事情が容易に察知できる。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

「道しるべでもって距離が標示されるように、その人の生涯でもって潑剌として力強い精神が標示されるような、たくましい精神の騎士、イデーの騎士が、いずれの世代にも存在する。その者の語る言葉は人生の最も大きな流れの一つを表し、その者の働きは個人や家族の域をこえ出て遙かな広がりを見せ、その者たちの名は歴史の大きな転回点を示し、その人格がもつ深い内容は、人類全体の精神意識を着色し形成し、彼らの叫ぶ声は様々な違いをこえて響きわたり、時代を高揚させ刺激させ、大きなそして厳粛で気高い運動を喚起させることとなる。

このような精神の道標、それがセーレン・キェルケゴールである。」

これこそが、バーフォーの刊行意図である。彼はキェルケゴールの生涯とその働きを理解する上で役立つと思われるテキストを、世に送り出そうとしている。その背後にあるのは、彼が刊行する本文テキストを通じて間接的に示されるキェルケゴール像を、読者に印銘づけたいとする願望である。どれほどバーフォーは、自分の刊行事業を幸せに思っていたかは、すぐにも察せられる。あえて言えば、彼は事実としてキェルケゴールの伝記を喜んで描き上げようとしたのである。彼は、当然そうすべきであると判断したとき――為すべきではなかったが――キェルケゴールの手稿を訂正すらもした。すなわち、キェルケゴールが用いた凡ての略語を元へと戻し、句読点を変え、文章が美しくなるとバーフォーに思われるものへと変更した。その訂正を、手稿の中に直接に書き込んだ。あるいは又、彼は植字工に幾つもの指示を与え、ここの箇所は注とすべきであるとか、ここはこのような組版にするようにとか、この箇所はここへと挿入すべきであるなどと指示した。

又、必要とした時には、鋏で日誌ノートのページを裂き、それを張りあわせて植字工に分かりやすいようにと処置した。あるいはページの裏に何かの記述があるとき、そのままでは印刷できないと判断すると、面倒にもそれを書き写して、手稿の別な場所に収録しようとした。このようにして元のものだけが印刷所にまわされ、バーフォーの刊行物の基本を成した。しかし、この時の元の

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

手稿の多くが戻らなかった。このため、1833年・34年から1844年にわたる時期の手稿のうち大半が失われてしまった。率直に言えば、バーフォーの刊行物は初動的な出版物以上のものではありえない。

要するにH・P・バーフォーは、その刊行物をもって、偉大で孤高の独創的な思想家の思想に対する一つのイメージを、読者に与えたいと願ったのである。かくて彼のキェルケゴール・イメージを強化し支持できがたいものは、そこでは収録されなかったのである。

遺稿文書第二版の刊行（1909—48年）

遺稿文書に関する新しい大部な出版が、1909年から48年にかけて実現された。これは、バーフォーに対して浴びせる嘲笑を意味するものでもあった。とは言え、バーフォーが取った態度は、前世紀において他の者たちの場合でも同一であったことを、考えねばならない。十九世紀末では、手稿が最初に印刷物となる時、そこでの手稿の権威とか価値に対する感覚が全くなかった。なぜ手稿が保存されねばならないのか、その理由を少しも弁えないまま印刷に付されていった。従って、当然そうでなければならないものを、これら手稿に対する慎重な配慮が欠けた。

1909年に始まり1948年に完結した新しい刊行物は、バーフォーの場合と同じ様に一つの絶対的な年代順に配列されている。ここでは、選び出されたものだけを集めて刊行するのではなく、キェルケゴールが書き残した全体を——けれども編集の手を入れて、印刷に付している。刊行者たちは序文の中で、一つのキェルケゴール・コレクションを提供すると述べる。だが、一切を包括したと言うのであれば、その言葉は粗雑にすぎる。彼らの意図では、公的にもしくは私的に所有されて現存する凡ゆる遺稿文書、あるいは既に印刷物となっている全体を、ここで総合して刊行しようとした。従って彼らは、バーフォーの目録にあるものだけでなく、印刷所から戻らなかったもの——しかしながらこれらはバーフォーの刊行物の中で見出される——凡てを収録していく。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

さらには、キェルケゴールやその両親・祖先の者たちに関係する記録とか文書にしても、公的ないしは私的な所有となって現存する一切を、印刷に付そうとした。あるいは又、キェルケゴールが自分で書いたものだけでなく、第三者の文章であっても、つまり読書した書物からキェルケゴールが抜き書きしたものとか、アンダーラインを施した部分をも収録した。しかし、キェルケゴールの蔵書物であっても、アンダーラインがない場合は、この限りではない。

刊行者たちは、それらを年代順に配置しただけでなく、新しいシステムを導入し、A・B・Cに区分けした。つまりAには、日誌及びばらばらな記述をおさめ、Bには、刊行された著作に先立つ草稿類或いは印刷出版物にならなかった作品の下書き等を含ませ、そしてCには、読書のメモ書きや書物からの抜粋などを収めた。刊行者たちは、Cをさらに三つの部分に区分けし、美的なもの・哲学的なもの・神学的なものに仕分けした。確かにこの区分は、キェルケゴールが時折、自分自身でも用いている。しかし刊行者たちは、それを体系化させて遺稿文書全体に当てがう。この結果、元来は遺稿文書に疎遠であるような体系化が出来てしまった。そうと言え彼らは、同時代では一般的に妥当とされた本文学の立場に立っていて、その仕事は、デンマークで現れた本文学の記念碑の一つと目されてよく、当然、多くの点で継承されてよいものである。

今日の我々がこの出版物〔遺稿集第二版〕に対して批判を向けるとき、その場合の視点が明確でなければならない。それは、刊行者たちの遂行した仕事が良くなかったからでなくて、そこでの原則が適切でなかったからである。彼らの原則は完璧な仕方で遂行されており、その点では良い仕事であったが、他の点で信頼を害ねるからである。彼らにしても、キェルケゴールの正書法に対しては慎重で、時々はその綴りの誤りを訂正するとか略語を元に戻すとかしているが、それほどしばしばではない。或いは又、キェルケゴールの句読点を変更することもあるが、ごく稀でしかない。全体としては略語をそのままで残して、随分な量になる本文批評を各巻末に付している。しかしそこにあるのは、長年にわたってこの刊行物と取り組んだ者でなければ、凡そ活用できそうにもない

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

資料批判となっている。

問題は、手稿が当初はどのような状態であったかに対して、少しも特別な顧慮を示していない点である。それゆえ、キェルケゴールがノート記述の各ページでそれぞれの記述をどのように関係づけていたかに対して、まったく注目しなかった。この点が彼らの本文批評の中でまったく顧慮されていない事情は、手稿の中の欄外記述を扱う彼らの作業を見れば、よく理解できる。キェルケゴールは、ノートの各ページを二つに折り目をつけ、最初に中心部に記入し、次に折り目の外側に幾つもの欄外記述を加えていく。これは、キェルケゴールだけの特別な事情ではなく、前世紀の著作家たち一般に見られた傾向である。このように著作家たちは、自分自身で本文の処理機構を案出し、紙頁を真ん中で折り曲げて書き続け、他方の半分はいつも空白で残し、その所に訂正とか加筆が出来るよう配慮した。キェルケゴールはこれを、彼なりに適切な仕方で遂行しており、従って欄外記述というものは、いつのときも中心部分の全体的な記述の一部に他ならない。それゆえ遺稿集第二版の刊行本で見られるように、欄外記述を本文の文脈から切り離して別のページへ移すとすれば、間違いであると私は思う。確かに、欄外にあったことが指摘されてはいるものの、それではテキスト本来の関係から切り離されて扱われたことになってしまうからである。

遺稿集第二版の背後にあるもの

もしキェルケゴールが当初に設定していたようなテキストの世界を再現しようとするのであれば、そのときの新しい刊行物はどのようでなければならないかが、問題となる。例えば、中心部分の記述に７つとか８つの欄外記述が絡み合わさる場合、これら欄外部分は様々な時期に書かれていることがあり、時として二年以上の隔たりをもつ場合もある。それゆえキェルケゴールが自分の記述へと戻るのは、編集するためでなくて、記述を書き加えるためであり、あるいは又、訂正を加えるためである。

この大部な遺稿集第二版の刊行理念は、日誌記述を休みなく続けたキリスト

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

教的著作家の一つの像を提示することであり、その日誌は或る種の教養小説として出来ている。これが、遺稿集第二版本で設定される中心的な視点である。ここで刊行者たちが作成した年表は、キェルケゴールの生涯における大きな内面的な出来事もしくはキリスト教的な出来事を挙げており、それらを通過していけば刊行者たちの中心的な視点が察せられる。つまり、そのようにして一つの教養小説を書き上げ、人物像を造形し、一種の教養的な自伝を作り上げていくように設定されている。つまりは、キェルケゴールの日誌の大部分が伝記的な記述であるよりは、むしろ詩的に出来ているという感覚が、刊行者たちに欠落していると私には思われる。日誌ノート「わたしと彼女との関係」にしても、キェルケゴールは「詩的に」と明記している。キェルケゴールはペンを取るとき、自らの文学活動の一部として、〈詩的に〉書き、仮にも彼が〈現実〉と向きあうときであっても、詩的な目線で処理していく。このため人は、伝記的なものと詩的なものとを、途方もなく混ぜ合わせてしまうことになる。

この大部な刊行物〔遺稿集第二版〕は既に売り尽くされており、その写真復刻版が1968年から78年にかけて出版された。このとき増補された二巻には、最初の刊行者たちが除外していた資料が収められた。それは、キェルケゴールの学生時代初期の講義ノートや読書した書物からの抜き書き等である。これによって復刻刊行者ツルストルプは、キェルケゴール自身の手で書かれていない第三者の資料を収録するという、本文学上の誤りを犯してしまった。キェルケゴールは幾冊かのノートを仲間の学生たちから借りたまま、それを返すのを忘れてしまっている。それゆえキェルケゴールとは無関係の講義筆録が、ここで見られることになる。ツルストルプは、彼が判断してふさわしいと思う一方の者から抜きとり、ふさわしいと思う他方の者から抜きとり、それらを接合する。これによって、一つの混合したテキストが出現することとなった。又、その種の講義要旨のようなものが、キェルケゴールの遺稿文書として適切かどうかも疑問である。なぜならこの当時、大学教授たちはしばしば自分たちの講義を、口うつしに口述筆記させていたからである。その事はマーテンセンの講義草稿

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

とキェルケゴールのノート筆記とを照合させれば、首肯できる。このような場合はキェルケゴールと関係がなく、キェルケゴールの手で書かれたものを越え出ている。彼が出席した講義の要約を自身で書き残した場合にして初めて、彼が何に関心を寄せていたかを推量する上で注目に値する。けれども口述通りに筆録された場合であれば、事情は異なる。

最後に、ツルストルプが1953年—54年に刊行した『キェルケゴールに関する手紙および関係文書』について。これは、秀れた内容の詳細な注を伴う刊行物である。しかし今日では、その増補が必要である。最大の理由の一つは、この刊行後に様々な手紙とかキェルケゴールの献辞記述などが発見されているからである。だから今われわれは、新しい刊行物の必要を痛感する。

『著作全集』の刊行物について

これまでは、専ら遺稿文書について述べてきたが、次にキェルケゴール著作全集の刊行物に言及したい。最初の著作全集は、遺稿集第二版の刊行者であるA・B・ドラクマン、J・P・ハイベヤー、H・ラングの編集によって、1901年—1906年に現れた。キェルケゴールの公刊著作が全体として刊行されたのは、これが最初である。ここには序文がないので、刊行者たちの編集方法は、直接にその刊行物を吟味することで見きわめる他はない。彼らは古典的な本文学を当てたと思われる。彼らは古典的な本文学の枠の中で教育を受け、従って聖書の本文研究で用いられるような本文学については、未経験であったに違いない。編集者たちはオリジナルな手稿に拠るのでなく、二次的な資料に即している。つまり、これまでの各種の二次的な印刷テキストを傍らにおき、それからオリジナルと思われる本文テキストを作り出していく。言い換えれば、手稿として残された各種の異文に拠るのでなく、二次的な異文〔印刷テキスト〕に基づいてオリジナルな本文を作成しようとする。この点が批判される。すなわち刊行者たちは、キェルケゴール自身が刊行した最初の初版本を用いるだけでなく、その後の重版をも用いる。彼らは、初版本を傍らにおき、重版からもテキスト

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

を取り出した。つまり、キェルケゴールが意図していたに相違ないと彼ら自身で想定して、「二次的な手」を加えたことになる。彼らとしても、時にはオリジナルな手稿と照合させ、そこから表現や語句を取り出して刊行テキストとさせている。これによって、言うなれば綜合的なテキストが出来てしまい、仮にこれをもって古典的なテキストとして適切であると言うのであれば、それ以上に言葉がない。けれども現代の本文学の原則からすると、汚染されたテキストを作ることは許されないのである。

この全集第一版を改版して同一人たちの手で、全集第二版が1920年—30年に出版された。これは、第一版における本文学上の原則を幾分か変更した訂正版となっている。第二版全集は、以前のものよりも「一次的な手」の方向に向いていて、「二次的な手」から離れようとしている。すなわち刊行者たちは、オリジナルな手稿に基づいて初版本テキストを正していく傾向が顕著である。このため、時には彼らの判断でキェルケゴールの意向を勝手に憶測して、初版本テキストを改変もした。言ってみれば、一種の意図的な本文を構成してしまった。つまりはこうである、この学問的な刊行物は汚染されたテキストであり、現実には存在しないような本文を作成したことになる。けれどもこれは、当時の本文学の伝統にかなったものでもある、——例えばその伝統は、スウェーデンでのストリンドベルイ全集の官製版の中で見事な開花を見せている。

この後、著作全集第三版がペーター・P・ローデによって刊行されたが、それは長期の使用には耐えがたい劣悪な出版物であり、本来は刊行されてならないはずのものである。そこでは、許されがたい間違いが数多く見られる。第一に、目新しい本文批評が何も見られない。(第二版全集ではそれなりの本文批評が貫行されている)。そこに一貫したものが整っていればそれなりに望ましいが、そうでなければ、文章や語句を死滅させるだけである。たまたま私は、第三版をテキストとした論文を読むために、これに当たったことがある。テキストは、絶望の諸形態について述べられる『死に至る病』の一節である。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

「この地上のものを取る（tage）ことはそれ自体が絶望することではない」
〔デンマーク語原典全集第三版108ページ〕

ここの文章は、次のようでなければならない。

「この地上のものを失う（tabe）ことはそれ自体が絶望することではない」
〔デンマーク語原典全集第二版185ページ〕

つまりは、全く逆になってしまっている。この事は、もし無防備の者が第三版をテキストにすれば、一再ならずキェルケゴールが意図する本来的な内容とは正反対の文章に身をさらす、危険に陥ることを意味している。明らかに学問的でない。それにも関わらず、私をはじめ他の批判者たちが苦笑するように、これが出版元のギュレンダール社に収益をもたらすのを我慢しなければならなかった。とは言っても、第三版全集がかくも広汎に一般に用いられるというのは、迷惑な話であり、質の点で耐えがたい！

キェルケゴール資料について

しばしばキェルケゴールは、前世紀のデンマークにおいて最大の著述家と言われてきたが、例えばグルントヴィやモルベックの著作活動に比べると、これは正しくない。けれども彼らの著述期間は多年にわたっているが、他方キェルケゴールの場合は、周知なようにごく短期間でしかない。キェルケゴールは1833年から、街頭で倒れる1855年10月２日まで、休みなく書き続けた。しばしば彼は日誌の中に書いている、著作することが自分にとって命である、と。次はその一つである。

「著述しているときだけ、自分が幸せと思う。そのとき私は、人生の嫌なこととか苦しみの凡てを忘れ去る。そのとき私は、わが思想の中にいて幸いである。もし幾日も著述しないでいると、すぐにも病気となり、打ち

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

しおれ、内にこもり、頭が重たく、うなだれる。
著作することは、わが命である……」

著作家としてのキェルケゴールの活動は、1843年から51年に至る僅か9年間でしかない。その期間に彼は、ほぼ40冊の著書を書き上げたが、それは全体で193万6031語に達する（これは我々のコンピューターの計算した数字である）。これらの公刊著作とともに、H・C・アンデルセンに関する評論『今もなお生きている者の手記』(1838年刊)、イロニーに関する学位論文(1841年)、さらには、1845年から55年にかけて刊行された小冊子〔『瞬間』ほか〕がこれに加わる。この他にノートによる日誌記述、作品の下書き、メモ類、ばらばらな書きつけなど、ほぼ10万語に達する手稿が付け加わることとなる。

キェルケゴール研究センター

いま我々は新版全集の刊行を準備しており、著作から始めて、次に遺稿文書を手がける計画でいる。

新版全集の刊行で第一の問題は、自明なように、本文テキストの決定である。どのテキストを選定するにしても、〈われわれ〉は編集者でしかない。編集者は、F・H・モーテンセン、ヨハンニ・コンドラップ、ヨアキム・ガフ、A・マッキンノン（カナダ)、それに私〔カペローン〕である。マッキンノンはパイオニア的な仕事をなしていて、すでにキェルケゴール全集に関するデータベースを仕上げている。

我々は長い熟考の末、キェルケゴールの最初の初版本テキストを基本にするという結論に達した。その理由は十分である。前述のようにキェルケゴールの著作は、全集第二版本となって出版されており、概して評価を得ているが、問題は残る。また多くはないが、若干の作品はキェルケゴールの生存中に重版となって出ているものもある。しかしそうであっても、一般にはキェルケゴールの最終意図が印刷されていると思われがちな重版のものを、なぜ選択しないの

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

か。我々はそれを拒否する。理由は次のように明白だからである、すなわちキェルケゴールは著書を刊行するとき、一冊の書物を用意するだけであって、仮にそれが重版となる場合にしても，この時の重版は最初に見られたのと同じ姿でなければならなかった。そのさい、彼が自分の従前の文章をあらためて手直しするような例は、全く見られないからである。例えばポントピダンの場合、次々と様々な改更を加えて新版を整えるが、キェルケゴールではそれが見られない。確かに校正ミスは自分で正すものの、文章を新しく書き変えるようなことは決して生じていない。他方、著書を出版するとき、彼自身で几帳面に校正しているのが、はっきりしている。彼は自分の著作の校正刷りを自身で読み、しばしばそれに手を入れて、一部を削除したり語句とか文章を補っている。けれども一度び校正が終わって印刷される段になると、それで書物は仕上がったのであり、著作活動の体系の中へと組みこまれていく。従って初版本テキストこそが、十分に本質的にも、以後にわたって影響を及ぼしていることとなり、だから我々は初版本テキストを基本テキストとする。

しかし問題が残る。初版本テキストとは、どのようなものか。前世紀の印刷技術は、今日の事情と全く異なる。当時は、一冊の書物がごく短期間で印刷された。又、しばしば印刷中に思わぬ事故が発生した。例えば、時折、植字工が紐で縛っていた組版が作業中に解けて、幾つかの活字が抜け落ちることもあった。植字工がそれに気付いて、別の間違った活字を押しこむ場合もあった。このため、初めとは違う別な組版が出現することもあり得た。

従って、妥当な理由が十分にあると判断されるとき、我々はテキストの校閲を行う。どのような場合に正しくし、どのような場合にそれが不可であるかを判定する細目を用意した。当然ながら、変更した箇所については説明が付される——しかし我々は、随分と控え目である。変更される箇所は、当然ながら我々編集者の責任であるが、ごく僅かである。我々は、汚染されたテキストを新たに作ることのないよう、最善を尽くしている。その一方で、もともとキェルケゴールが（あるいは植字工が）望んでいたと思われるテキストを作り出すこと

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

になる。そこには問題がたえずつきまとう。例えば、初版本テキストとキェルケゴールの用意した印刷原稿とが一致しないで、校正刷りも残っていない場合、植字工のミスであるのかどうか、その事をキェルケゴールは校正中にどこまで知ったのかどうか、あるいは校正の段階で自分から修正したのかどうか、我々には測りがたい。

我々はあくまでもキェルケゴールの正書法に従い、たとい風変わりな成語や語形があっても、概して無視してキェルケゴールに従う。仮に私がユラン地方の出身者であっても使用しないような新語が、近頃では使われる。キェルケゴールはユランの出身であるため、その書物の中で種々とユラン的な用字が見られる。それゆえ我々が上の点で行き詰まると、ユラン方言辞典に当たった。その結果、同一の語が三回出てきたときには、キェルケゴールの綴りが不正確でさえなければ、その風変わりな用字を認めた。

キェルケゴールは、正字法については無条件にモルベックに従うと記している。明らかにそれは、モルベックの辞書を指している。が、正字法に関して彼は特別に優秀であったのでは決してなく、また必ずしもモルベックの辞書に忠実であったとも言えない。

> 「モルベックを訂正しようなどと思いもしない、というのは、この点での知見が私に欠けると思うからである。だからデンマークのどの著作家に比べても、私ほど臆病な者はいないと思う。
>
> 句読法に関しては、全く別である。ここでは私は、誰に対しても屈服しない。この点で、私に匹敵できるような著作家がデンマークにいるとは思えない。‥‥私は作品の性格に応じて、句読法に差異をつける。学術的な作品の場合は、文学的な技法をこらした作品の場合と異なる句読法を当てる。」

以上を念頭におけば、この場所で句読点がふさわしいと思われても、勝手に

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

書き入れてはならない。キェルケゴールは意識して、句読点を当てがっているからである。しかしそれが常に成功しているかどうかは別問題で、それはあとで判断すべき事柄である。

出版印刷の方法

次の問題は、テキストをどのように提供するかである。キェルケゴールは、一般に花文字と呼ばれるゴシック文字で印刷させている。また、ラテン語、表題・人名等の表記、あるいは強調したい単語とか語句などには、様々な活字体を当てがい読者に注意を促す。加えてギリシャ語やヘブライ語が入る。その他にも、隔字体、中細字体など様々な種類のもので溢れている。

これはキェルケゴールの場合だけが特殊であったのでなく、同時代の印刷技法の慣習であった。けれども彼の場合は、普通以上の関心を抱いていた。周知なように彼自身が印刷所へ行き、原稿を自分で手渡し、どのような活字で組むべきかを、直接、植字工に指示したと思われる。それゆえ彼は、自分の書物がどのような形で印刷されていくかについて随分と神経を使い、印刷に際して様々な指示を下した。それだけに我々は、この点に対する配慮を疎かにしてはならない。

キェルケゴール資料の収録

次の問題は、新版全集にキェルケゴール資料の何を収録するかである。キェルケゴール自身が印刷出版した公刊著作は勿論、新聞・雑誌等に発表した凡ての論文が、当然、含まれてくる。その上に、彼が死後に出版されるよう明記して浄書された作品、『著作活動の視点』『自分を吟味せよ』『瞬間』の最終号（第10巻）等を所収することにも問題がない。問題は、未定稿として遺された原稿をどのように扱うかである。例えば、「ハイベヤー教授への手紙」のような場合である。彼は、これを書き上げたものの公刊しなかったし、すぐにも出版できるよう整えられてもいない。この他にも、幾つもの未定稿がある。著作を書き上げるとき、キェルケゴールには四つの段階が見られる。すなわち、当初のメ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

モ書きの段階、念頭に浮かぶ想念の粗述段階、それの最終的な仕上げ、そして印刷原稿の段階である。これらの一連の成立過程が提示されねばならない。それを我々は、印刷物の形態ではなくて、データベースでもって刊行する。

次の問題は、どの順序で刊行物を整えるかである。当然、初版本にならうべきであると、つまり初版本に忠実に、同じ形態で同一順序で、と言われる。これは、一種の複製本の出版ということになる。しかしそれは不可能であり、読者に大きな寄与をもたらすとは思えない。その上、初版本での夫々の異なる形態を考えると、不揃いで不均等な刊行物になってしまう。又、論文とか新聞に発表された文章は、どのような体裁にするのか、難問に突き当たる。

作品を一冊ずつ小分けにして刊行するか、そうでなければ合冊本として出すかである。では、作品を出版された年代順に配置するのか、それとも原稿が仕上がった年代順に配置するのか。例えば『死に至る病』の場合、出版された年月日よりも半年前に印刷原稿が仕上がっており、それを出版する可否をめぐって繰り返し彼は懊悩していた。

作品の成立した年代順を採用すれば、一冊の書物を分割しなければならない結果となる。なぜなら『死に至る病』の前半は、後半部分とは別の時期に仕上がっているためである。このような事は、『キリスト教講話』『さまざまな主題による建徳的講話』の場合にも妥当し、その他の作品にしても同様となる。それは全く望ましい事柄でなく、それでは全体を掻き混ぜてしまうことになる。

出版年代の配置

我々は、キェルケゴールの著作活動を各層ごとに出版年代順にまとめることにした。例えば、1834年・44年の一連の建徳的講話は一冊に収め、出版年順に配列する。しかしここでも問題が生じる、例えば『序文集』と『不安の概念』は同一日の刊行物であり、『反復』及び『畏れとおののき』も同一日の出版物である。これらはもともとキェルケゴールにとって、どのような順序であったか

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

がきわめて重要である。ヒルシュによれば、『畏れとおののき』は『反復』よりも以前に書き上げられたと主張されるが、今日、紙質やインクの種類から判断すると、ヒルシュは間違っており、そうとは言えない。他でも考慮を要する様々な問題がある。キェルケゴールの作品では単純な区分けが困難で、だからと言って、文学的な作品とそうでない理論的な作品とを区分することも難しい。結局は別の基準をあてがう他はない、すなわち仮名による作品と、そうでない場合とに。

これら本文テキスト全体に対して注記が付される。それは釈義的な注釈でなく、資料に関する歴史的な注記という形をとる。我々は新版全集の刊行をもって、特定のキェルケゴール解釈を枠づけたいと願わない。それゆえ例えば、この作品が何を意図するものであるか或いは著作活動の中でどのように位置づけられるものであるか、そのような言及を含む序言は、一切、付さない。他方、手稿記述とか作品が成立する過程（生成史）に関して言及する。しかし解釈は一切しない。解釈するような遺り口は、学問的な刊行物の中では、元よりそぐわない。そのような事は、あとになって別個に生じるべき事柄である。

各巻ごとに、夫々の注解が別巻となって配置される。各ページの下方に、テキストをめぐってキェルケゴール自身が下した記入〔例えば本文テキストの校正書きなど〕及び我々の注記を加える。注解は別巻とさせる。一つには、それらを本文テキストと切り離したいためであり、一つにはその仕方がきわめて実用的と判断されるからである。つまり、座って読むとき、書物の後頁へとたえず戻って見返すのではなく、別な書物の中で見ることが出来るように、と。さらに第三の理由としては、注解は後日になって訂正が必要となれば、本文テキスト本をそのままにして、それから切り離して新しい版を独自に刊行も出来るからである。

一般に「日誌・遺稿集」（Papirer）と呼ばれる手稿は、70冊に及ぶ綴じられ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

たノート記述から成り、日誌、メモ書き、手帳での記述、小冊子、ばらばらな紙での書き込みなど大部なコレクションを成している。当初キェルケゴールは、綴じられたノート記述を **AA** からアルファベット順に **KK** へと、これらを名づけた。それらは1835年から始まり――おそらく一部は1833年にさか上るかもしれない――1846年9月にわたっている。1846年3月からは、**NB**、**NB**[1]から **NB**[36]と名づけられる日誌記述が続く。それらは全体で7600ページに達し、〔身辺の事情を綴る日記というよりは〕本来は日誌（journal）として性格づけられるものである。

手稿には、かなりの大きい差異が見られる。**AA** から **KK** までのものは、構想メモ、ノート記述、作品の下書き、習作原稿、新聞記事に対する私見メモ、散歩の途次に彼の詩的な感覚でとらえた事物の粗述、等である。これらを通じて我々は、イデーがどのように蝟集しどのように成立していくか、その道程を覗くことが出来る。『完結的な非学問的後書』が刊行された1846年になって、つまりは著作活動の前半が終結した時点では、ノートによる記述が変化を見せ、本来的に日誌（journal）と呼ばれるようなものになっている。これらは自分自身をめぐる吟味であると共に、著作活動とか公衆社会とか、或いは1848年の社会変動、コルサー紙、レギーネやその父オルセン、又はミュンスター監督などと関係してキェルケゴール自身の意を綴る内容となっている。これらは「日誌」（journal）と呼ばれる性格の、キェルケゴールの第二の別個な執筆活動とも言える。いずれにせよこれら日誌記述は、慎重な配慮が必要とされる性格を十二分に具えている。journal という呼称が適切かどうか、私には分からない。しかし「日記」と言えば、料理の話とか太陽が出ていたとか、馬車旅行をしたとか、自分はこのように考えたとか言う、日常身辺の内容が想像される。しかしキェルケゴールの場合には、このような一般的な記述がきわめて僅かである。例えば、彼がベルリンへ船で向かったとき、どのような素晴らしい船であったかなど少しも書かず、そこでの記述内容は、彼の心の中の動揺に関して述べられる。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

こうした日誌記述のほかに、ばらばらな紙での記入がある。また手紙や関係文書類がある。さらには、読書した書物に施した書き込みもある。キェルケゴールが所有したギリシャ語新約聖書、彼の蔵書であってこれまで知られなかった『式文・祈禱書』などがある。これらに関しては、今まで公開されなかったし研究もされなかった。実際ギリシャ語新約聖書には、ヘブライ語・ギリシャ語・ラテン語・デンマーク語によるキェルケゴールの書き込みが一杯にある。

問題は今、どのようにしてオリジナルな手稿の全体を新版全集の中に印刷物として収録するかである。ここで明言しておくが、我々は絶対的な年代順という処理方法を放棄せねばならない。なぜなら、絶対的な年代順という処理に固執するならば、キェルケゴールが記すノート記述、メモ書き、下書きなどの全体を、ばらばらにしてしまうことになるからである。

これに代わって我々は、ルンやバーフォーの目録に助けられながら、「年代的な誤謬」を犯さないよう注意しつつ、キェルケゴールのノート記述、メモ書き、下書きなどを、キェルケゴール自身が整えた全体的な枠組み——当然、資料文書がそのように扱われるよう望んでいた当初の形態を再現しようとする。そして十分と満足できるような仕方で、これを遂行しようとする。このため、各ページにわたってきわめて細密な作業が施される。そのようにして手稿全体が整えられるならば、当然ながら、従前とは随分と違ったものが浮かび出ることになろう。

電子情報による刊行

すでに指摘したように、同時に、電子情報による刊行を企てる。それはウィンドウズ・システムを援用し、最初に全体のメニュー画面が提示され、次に英語かデンマーク語のテキストで作業するかどうかが問われる。このあとユーザーは新しいメニューに接する。例えば『完結的な後書』を見たいとすれば、そこでのメニュー画面に従って、『後書』が成立していくまでの前作業の全体的な流れを追うことが出来ることになる。そのような仕方で、さらに前へと進んだり或いは後ろに戻るなどの、作業工程が可能なように、プログラムが組まれる

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ことになっている。

Søren Kierkegaards Skrifter i ny udgave

Af Niels Jørgen Cappelørn, cand.theol., leder af Søren Kierkegaard Forskningscentret ved Københavns Universitet

Nedskrevet og redigeret fra bånd af Pernille H. Larsen, stud.mag., Københavns Universitet. Foredraget blev holdt ved lektorseminaret på Sostrup Slot 1995
(overs. af JUN HASHIMOTO til japansk)

NII-Electronic Library Service